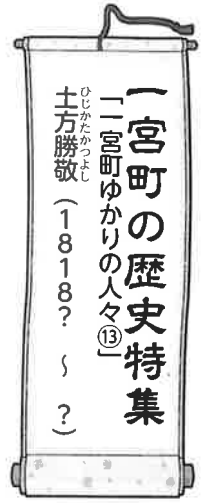


平成31年 4月号



一宮町の歴史特集
一宮町ゆかりの人々⑩
土方勝敬(1818? ~ ?)

土方勝敬は幕末期の江戸幕府の旗本で、最後の浦賀奉行をつとめた人物です。
土方家は江戸時代初期から東浪見村の支配に携わっていました。東浪見村は大多喜藩領ののち、幕府の旗本の相給地(一つの村に対し複数の領主が割り当てられること)となり、土方家・服部家・興津家・高林家の4家が領主として確認できます。

勝敬は天保9年(1838)に土方家を継ぎ、弘化3年(1846)には使番となっています。その後さまざまな役を歴任、文久2年(1862)には火付盗賊改方頭、元治元年(1864)に浦賀奉行に就任しました。明治維新を迎えたのち、慶応4年(1868)に奉行所を新政府に引き渡しました。そののち、勝敬は家族とともに東浪見村で余生を過ごしたといえます。

さて、勝敬と東浪見村との関わりを少し見ていきたいと思います。正満寺の過去帳の中に確認できるほか、東浪

見寺にもその足跡があります。戦時中に供出されてしまったという寺宝の唐銅額(約120kg)は弘化4年(1847)に勝敬が東浪見寺に寄進したものだといえます。また本堂につながる階段も勝敬の寄進と伝わります。

このように、今に伝わるものは数少ないですが、確かに土方家は東浪見村の支配を行っていたことが分かります。

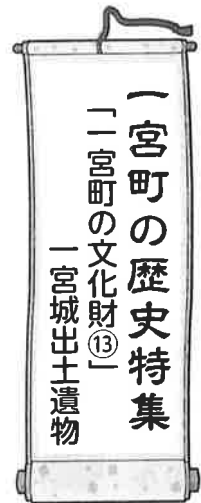
※寛永2年(1625)の土方家の初代・勝直宛の朱印状によると、土方家の一宮に関わる領地としては、東浪見村1250石、宮原村250石がみえます。



▲ 東浪見寺のふもと

問合せ 教育課 ☎(42)1416

令和元年 5月号



一宮町の歴史特集
一宮町の文化財⑬
一宮城出土遺物

一宮城は戦国時代頃まで存在し、この地域の拠点の一つとして存在した城でした。

昭和58年(1984)、振武館建設に伴い、城跡の一部が発掘調査されました。この発掘で建物跡や池跡が発見され、多数の土器などが出土しました。この出土した資料が一括で平成17年(2004)に町の指定となっています。

具体的に出土したものとしては、陶磁器やかわらけ(土器)、鉄砲玉、古銭、石塔、鉄製品(武器・武具の一部)などです。年代は戦国時代の16世紀、1560〜70年代ではないかと推定されています。特徴的なものは鉄砲玉と耳かわらけ、中国産の鉄釉茶碗で、県内でも非常に少ない出土例の一つです。耳かわらけは耳のような形をした土器で、箸置きとして使用されたものではないかと考えられています。

一宮城の城主は里見氏の家臣である一宮正木氏だったと考えられています。

ます。この一宮正木氏についてはまだわからないことが多くあり、その実態や実力がどれほどのものだったのかはわかりません。ですが、この出土した資料やその量、城の遺構から考えるとそれなりの影響力を持った一族だったことが推測されます。そしてそれはまた、この一宮という地域が戦国時代に重要な拠点として存在したことを示す、重要な手がかりであると言えるでしょう。



▲ 出土遺物の一部

【問合せ】教育課 ☎(42)1416